
A病院における透析患者の腎移植に関する意識調査

佐藤節子、野呂きみ、五十嵐元子、高松絵里子

秋田社会保険病院透析室、同 4階西泌尿器科病棟、同 泌尿器科外来

An Attitude Survey of Renal Transplantation of the Hemodialysis Patients in the A Hospital

Setsuko Sato, Kimi Noro, Motoko Igarashi, Eriko Takamatsu

Hemodialysis room, Urology section, Urology Outpatient Section,

Akita Social Insurance Hospital

〈緒言〉

我が国では2009年臓器移植法の改正を受け、脳死下での臓器移植に関する条件が緩和され、実施件数は増加傾向にある。秋田県においては生体腎の移植件数や生着率、生存率が向上し、成功例が増加している。A病院透析室開設当時の昭和50年から約20年間は、県外に出向いての移植手術となり、2名にとどまっていた。しかし県内で移植手術が可能になった約15年間で血液透析患者が腎移植を受けたのは10名にのぼっている。現在A病院での全血液透析患者は37名であり、そのうち腎移植登録済または手続き中の患者は3名となっている。年々透析患者が増加し、年齢的に移植可能な患者も多く、腎移植に関する考えや思いについて知りたいと考えた。今回、外来透析患者を対象に、腎移植についての意識調査を実施し、今後の看護支援の方向性を検討したので報告する。

〈対象と方法〉

1. 対象：A病院外来透析患者（移植後慢性拒絶反応の患者1名を除いた）36名
2. 期間：平成25年9月～11月
3. 方法：研究者らが独自に作成したアンケート用紙を用いて無記名で選択法と自由記載法とし、回収箱への投函とした。内容は①属性（年齢、性別、透析歴）、②家族（6親等以内）と腎移植について話をしたことがあるか、③死体腎登録をしているか、④可能なら腎移植を受けたいと思うか、また希望しない理由、⑤自由回答とし、単純集計を行った。倫理的配慮として、研究の趣旨と個人が特定されないようにプライバシーの保護を厳守し、得られたデータは研究目的以外で使用しないように口頭で説明し、了承を得た。

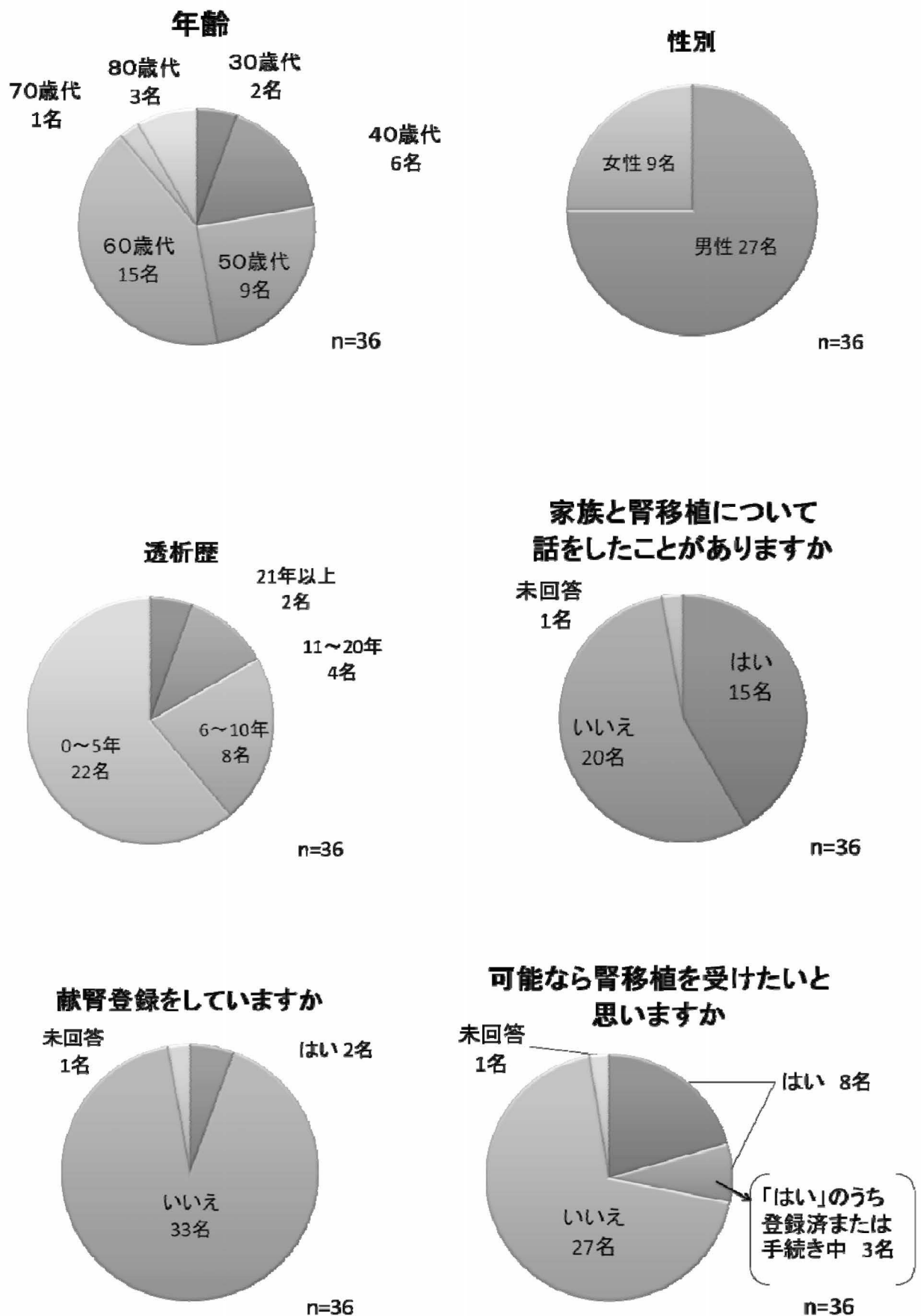


図1 結果

〈結果〉

(図1) 属性は、年齢30歳代2名、40歳代6名、50歳代9名、60歳代15名、70歳代1名、80歳代3名だった。性別は男性27名、女性9名だった。透析歴は21年以上2名、11～20年4名、6～10年8名、0～5年22名だった。家族(6親等以内)と腎移植について話をしたことはあるかでは「はい」15名、「いいえ」20名、未回答1名だった。献腎登録をしているかでは「はい」2名、「いいえ」33名、未回答1名だった。可能なら腎移植を受けたいと思うかでは「はい」8名、うち登録済または手続き中が3名、「いいえ」27名、未回答が1名だった。腎移植を希望しない理由としては、近親者への遠慮や不安が10名、透析生活に満足が6名、手術費用の不安が3名、登録後の手術遅延への不安が2名、成功への不安が2名、高齢が1名、年金停止への不安が1名、レシピエントの知能障害が1名だった。その他自由回答として、以前は希望していたが、経済的理由、近親者への遠慮で希望しない、透析後すぐに登録した、3年以内には妻からの移植を考えている、死体腎は嫌などがあった。

〈考察〉

漠然と腎移植を受けたいとは思っていても実際は近親者への遠慮や金銭的な不安での葛藤があることが分かった。また、腎移植を希望しない理由として近親者への遠慮や、現在の生活に満足していることなどが分かった。今回の調査では年齢と腎移植への意識の関係は導くことができなかったが、日々医療が進歩している中でも実際に患者の声を聞くことで様々な葛藤があることが分かった。今後は患者の希望に合わせた情報提供が必要と考える。恥ずかしがり屋といった地域柄や、年代を考慮して患者個人の気持ちを尊重し患者の希望に沿った支援、倫理的視点を持って接することが必要と考える。

〈結語〉

1. 腎移植を希望している患者は8名であり、全体の2割と少なく、そのうち献腎登録をしているのは2名、近親者をドナーとした進行中の1名だった。
2. 腎移植について家族で話し合ったことがある患者は全体の4割だった。
3. 腎移植を希望しない理由は近親者への遠慮が多いことが分かった。
4. 移植についての情報を、外来透析室と導入時の病棟が共有し、患者の希望に沿った支援が必要と考えた。